門 間 沼 遺 跡

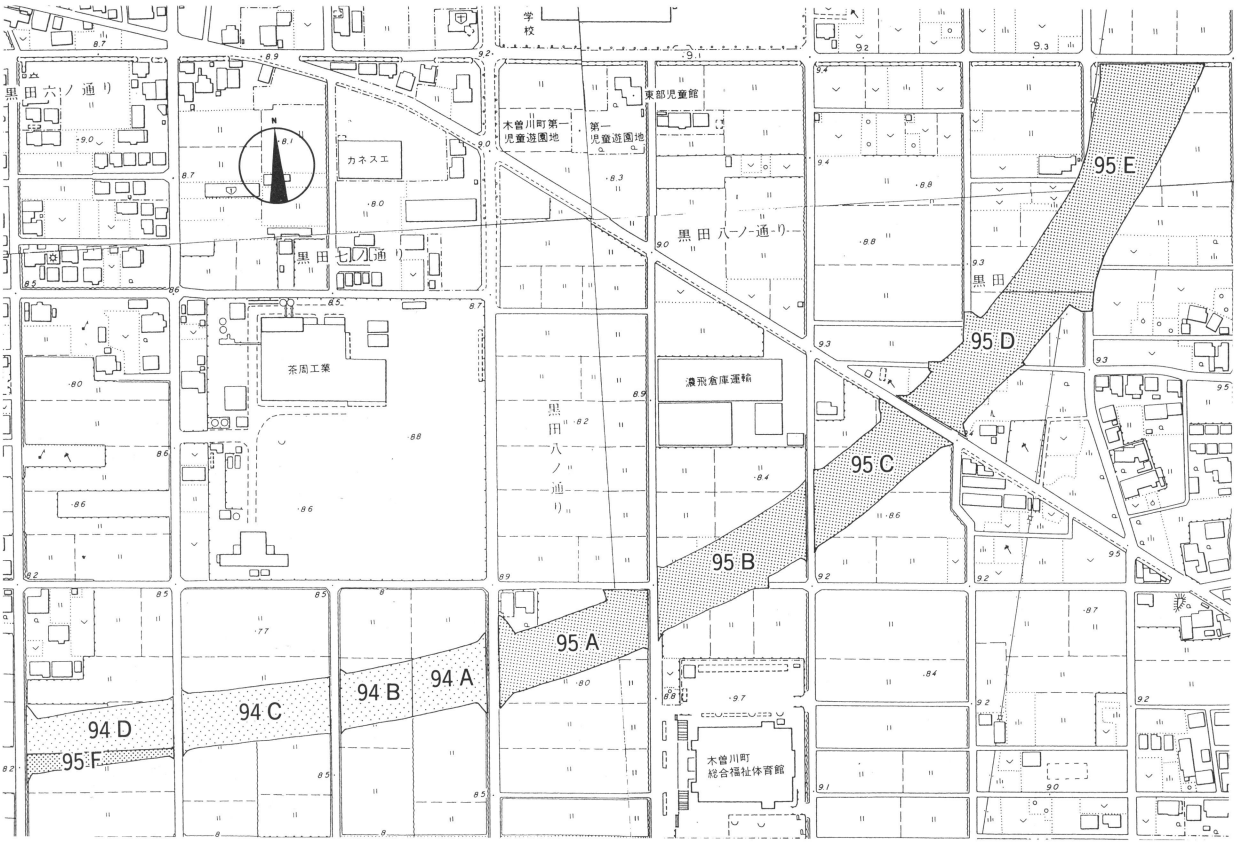
調査の経過　門間沼遺跡は、葉栗郡木曽川町大字門間字沼に所在する。本遺跡は、木曽川によって形成された標高８～９ｍの微高地上に立地している古墳時代から中世にかけての複合遺跡である。

発掘調査は、東海北陸自動車道の建設に先立つもので、日本道路公団・愛知県土木部から愛知県教育委員会を通じて委託を受け、昨年度から継続的に実施し、今年度は、４月より28,440㎡を発掘調査した。

調査の概要　本遺跡の調査にあたって、昨年度に調査した94Ａ区の東からＡ区、Ｂ区、Ｃ区、Ｄ区、Ｅ区、94Ｄ区の南をＦ区とし、調査区を６区分して、Ａ区とＢ区、Ｃ区とＤ区をセットにして、Ａ区から順番に調査を進めた。

本遺跡の遺構は、大きく古墳時代前期、古代、中世の３時期に区分される。古墳時代前期の遺構としては水田跡が、古代の遺構としては竪穴建物群や大溝が、中世の遺構としては大型の方形土坑や井戸が検出された。古墳時代前期の水田跡や古代の大溝は池田遺跡に続くものと思われる。

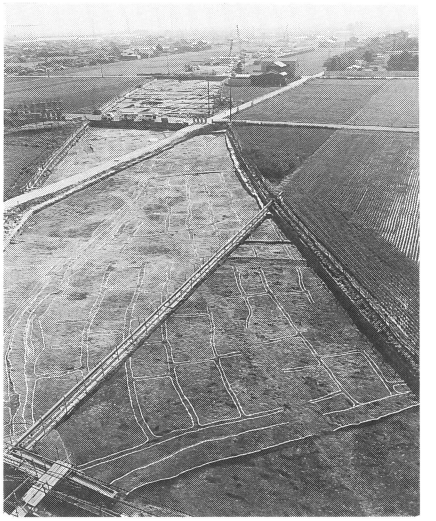
以下、古墳時代前期、古代、中世の時期別に調査成果を報告する。　　（神谷知幸）



第１図　調査区位置図（１／5000）

古墳時代の水田　昨年度の調査では、標高８ｍほどの微高地上に位置する古墳時代の集落跡(３～６世紀)と円墳群(５世紀末～６世紀)を検出し、その西の低地で古墳時代前期に属す水田の一部を確認した。

本年度の調査区は、昨年度の調査区の東に位置し、94Ａ区に隣接する95Ａ区では、微高地の東端が確認された。そこで検出された６世紀代の建物の一部が、古墳時代前期の水田と重複していることから、微高地縁辺のかなり高い部分から水田域が始まっていることが明らかになった。水田の標高は7.6ｍ～7.7ｍ程度で、黒色シルトを基盤とし、調査区のほぼ全域に展開することが確認された。

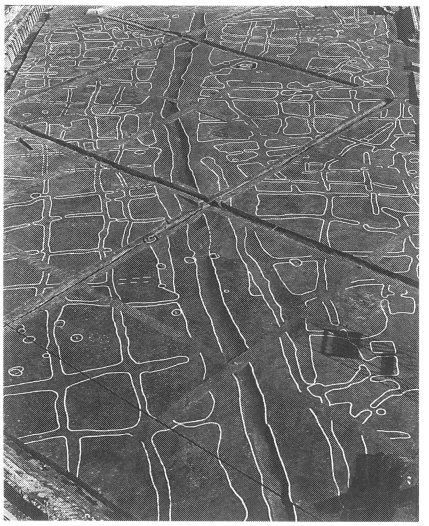

Ｂ区全景　北東から

小区画を構成する畦畔は、幅30cm程度、高さ５cm未満である。地形により区画の規模や形を変えており、一筆あたりの面積は一様ではない。が、方向性はほぼ一定しており、等高線に沿って規格的に区画しようという意図がうかがえる。水口も検出されている。

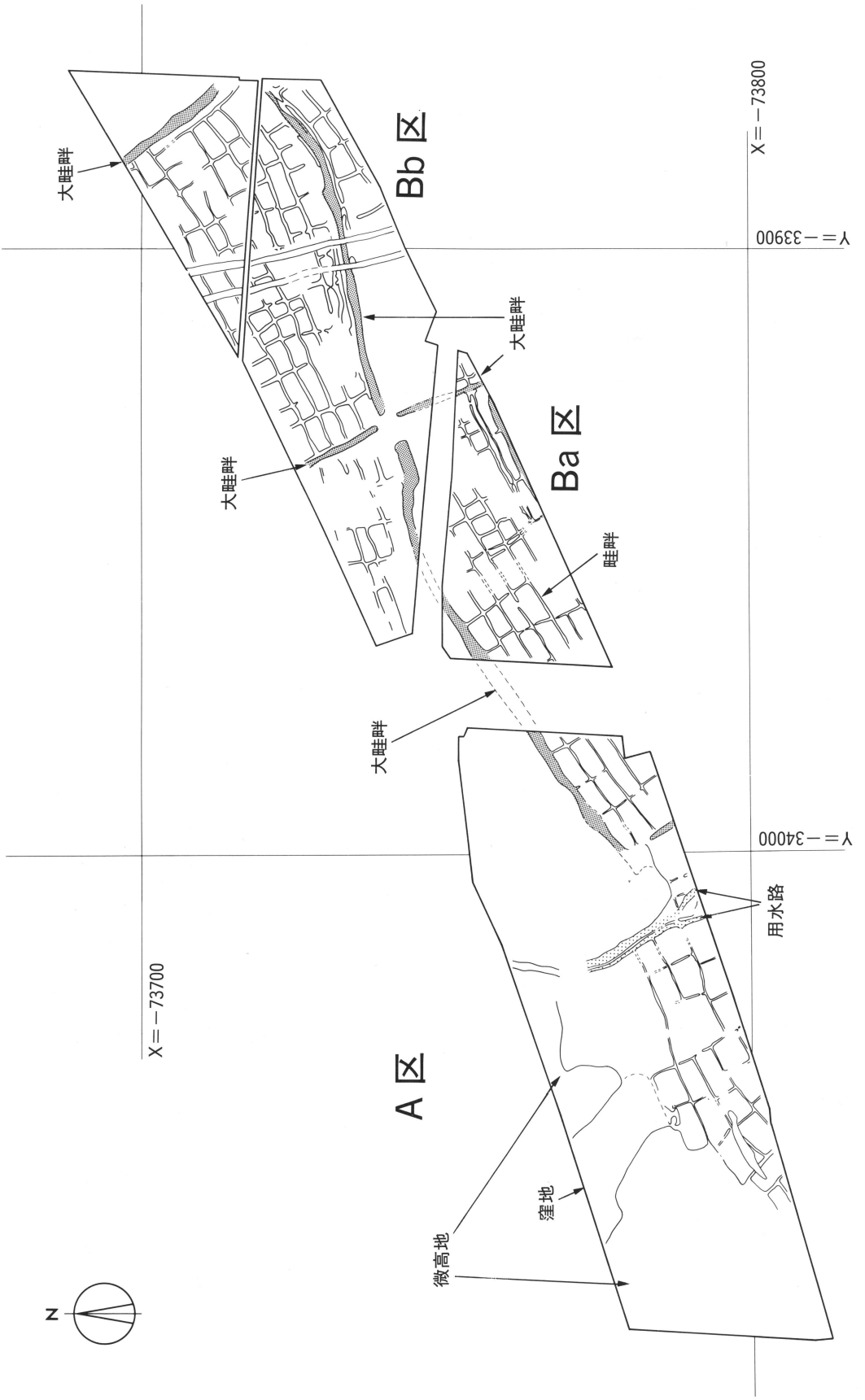
大区画を構成するのは、幅３ｍ内外、高さ20cm以上の規模をもつ畦畔で、これを「大畦畔」と呼称する。両脇に、造成時に土を掻き上げた痕跡と見られる窪地を伴っている。Ａ・Ｂ区では、「道」としての機能も想定すべきであろう。Ｃ・Ｄ区では、大畦畔間に挟まれた幅110cm程度、深さ20cm程度の溝を検出しており、大畦畔と用水路が一体のものになっている。一定の間隔で大畦畔が並ぶ様相もうかがえ、大区画が計画的に造成されている可能性も考えられる。

本年度の調査区で検出された水田は、隣接する大毛池田遺跡の「下面水田」に対応するものと考えられる。この水田は、堆積状況からみて、古墳時代前期（４世紀前半）には洪水によって埋没した模様である。なお、大毛池田遺跡で言う「上面水田」は、Ｂ・Ｄ区の一部でその存在が認められた。古墳時代中期（５世紀前半）に洪水により埋没したと思われるが、一部を検出したにとどまった。

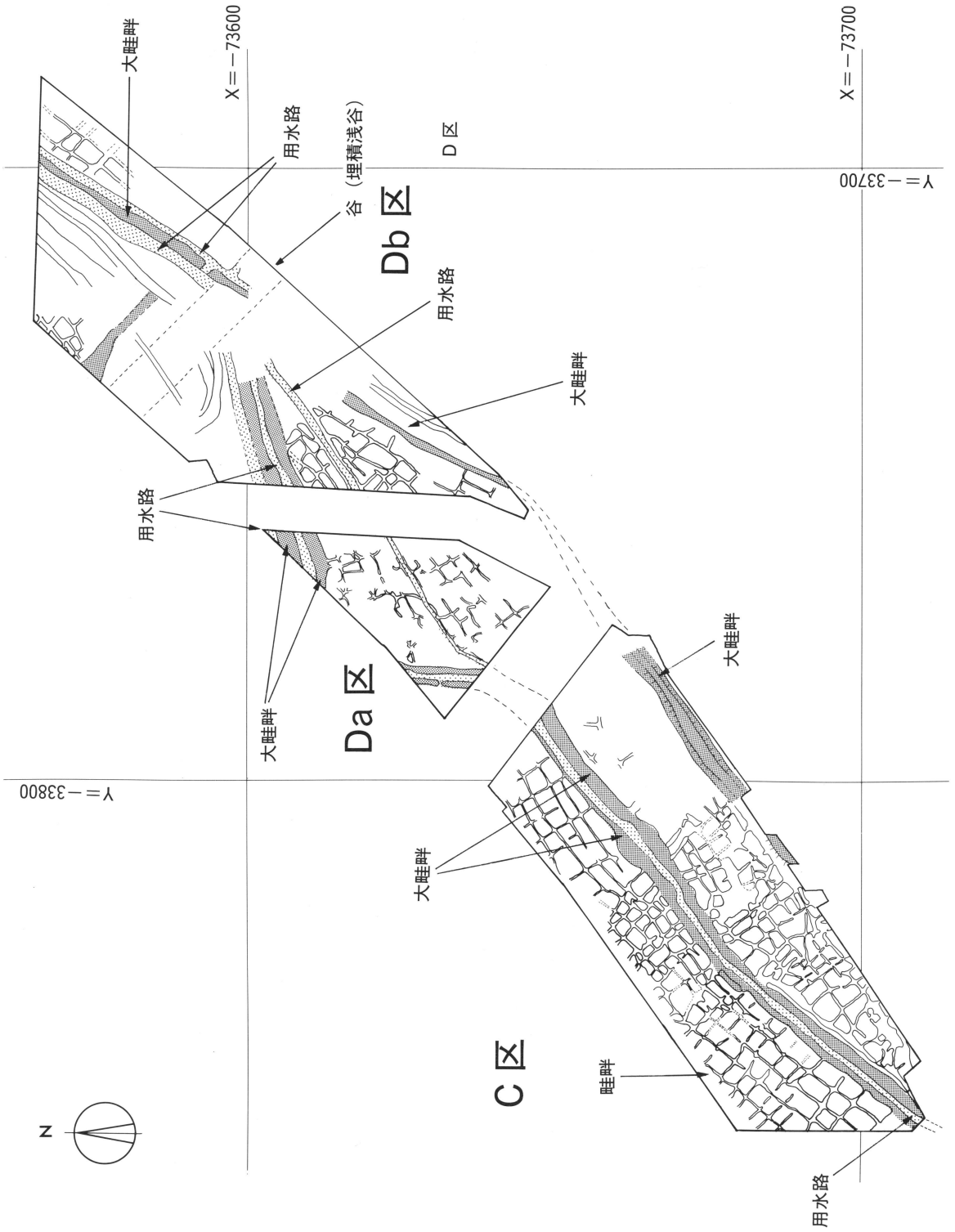
（西原正佳）


Ｃ区　一体となった大畦畔と用水路

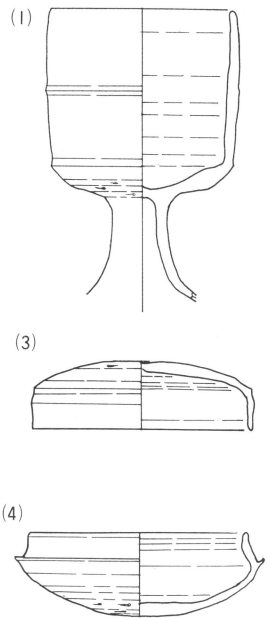
Ｃ区全景　南西から

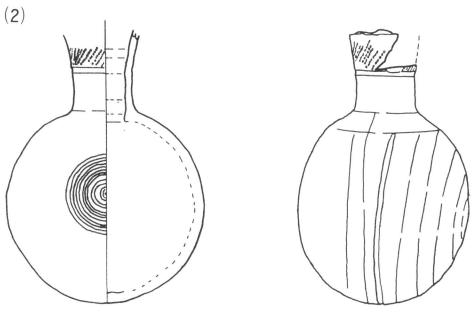


第２図　Ａ・Ｂ区古墳時代遺構図（１：1000）



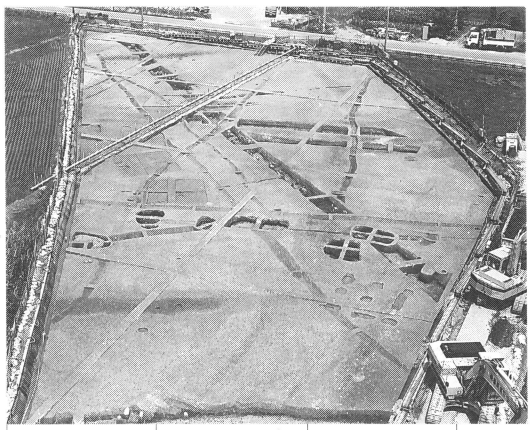
第３図　Ｃ・Ｄ区古墳時代遺構図（１：1000）



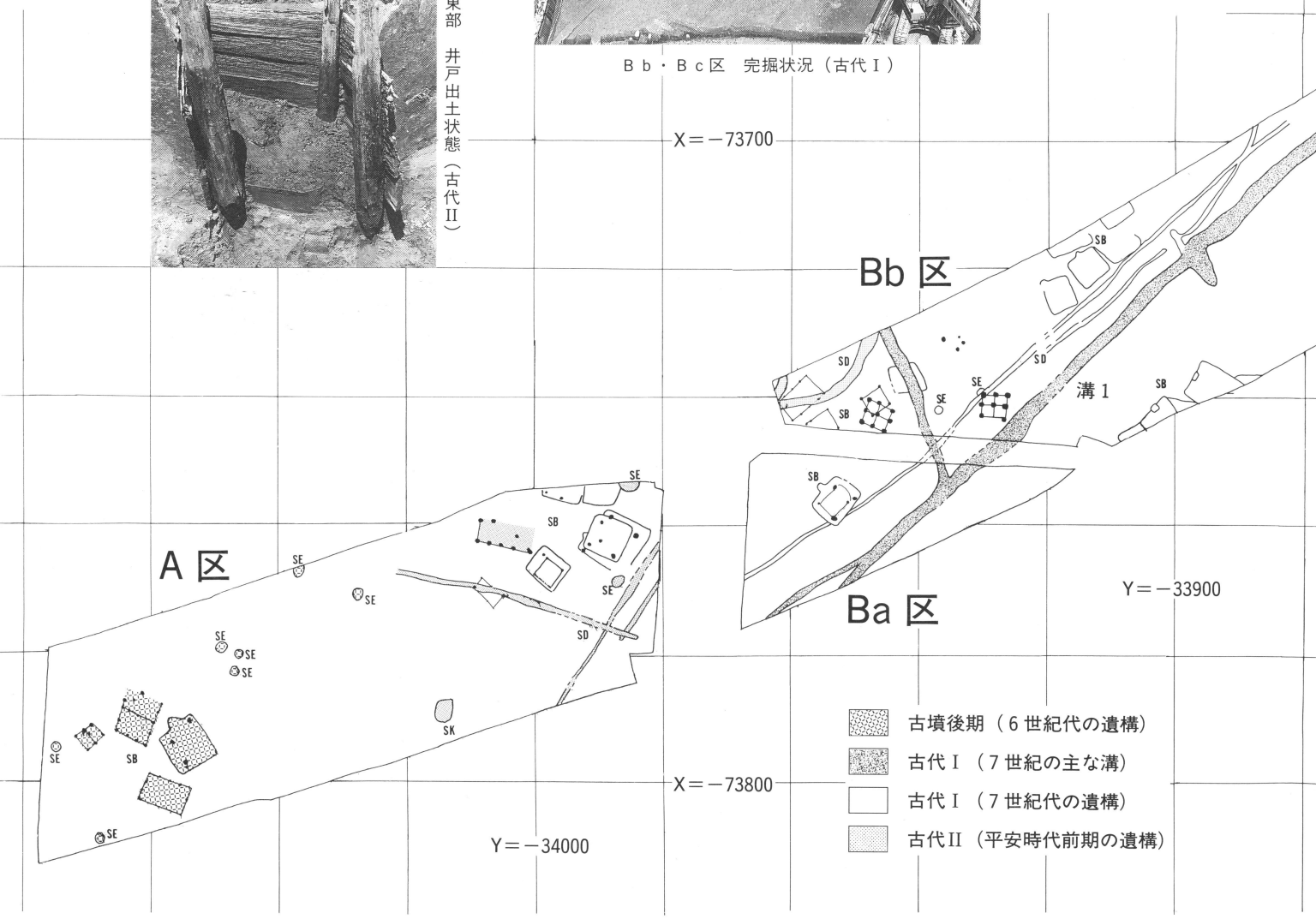


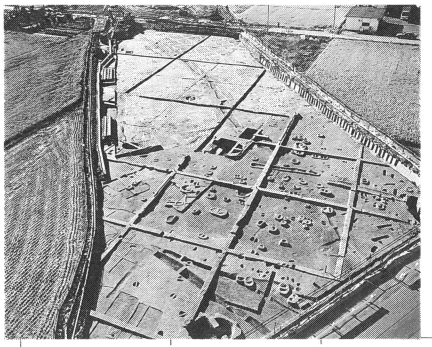
溝Ⅰ出土遺物　S＝1/4

A区東部　井戸出土状態（古代Ⅱ）

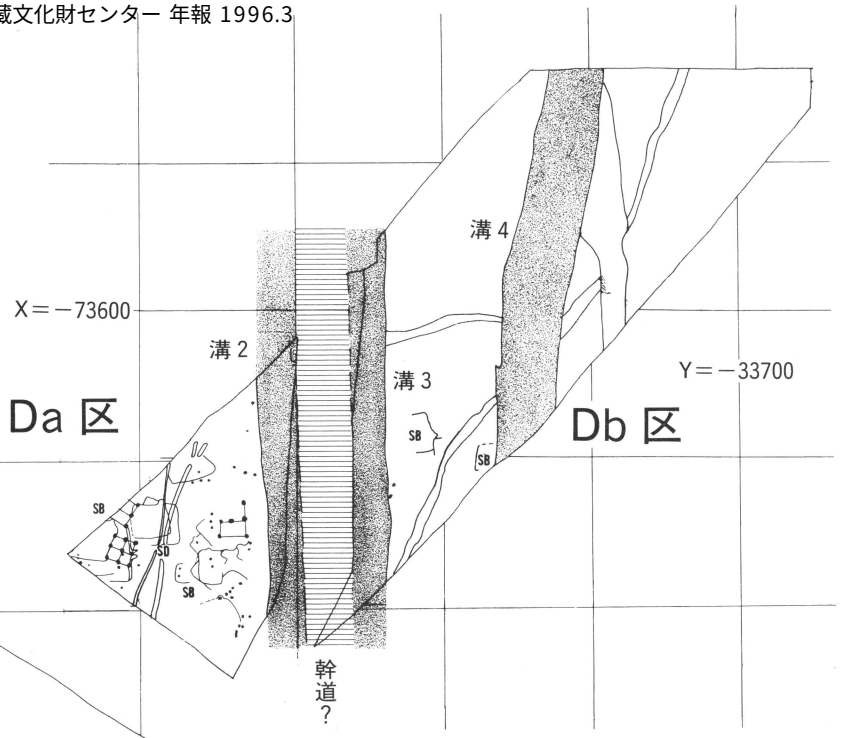


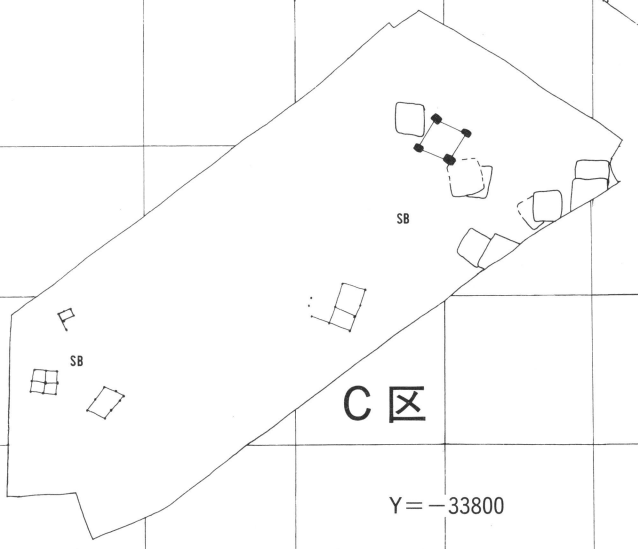
Ｂｂ・Ｂｃ区　完掘状況（古代Ⅰ）



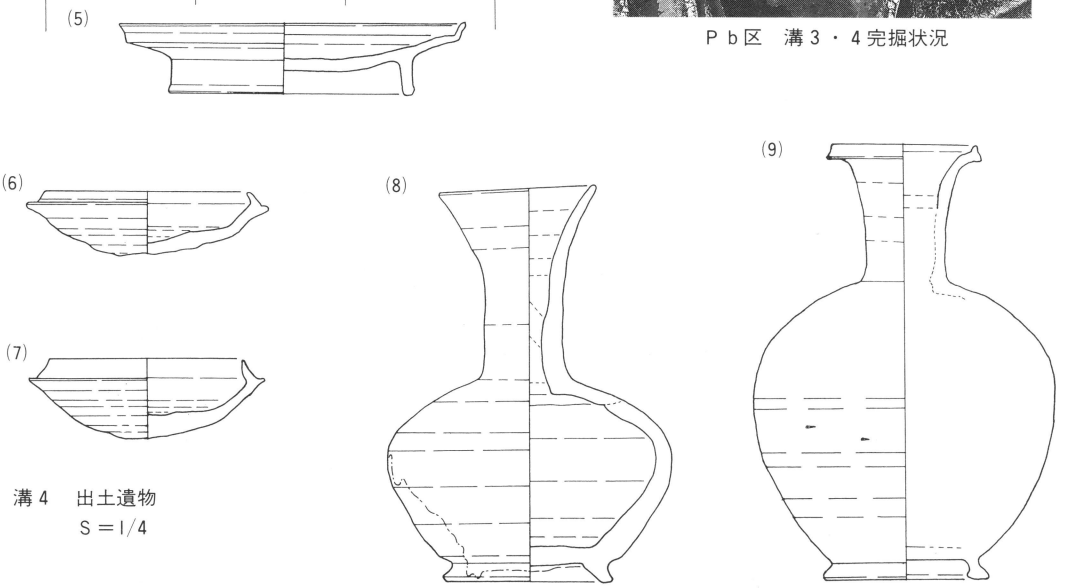


C区北東部　完掘状況（古代Ⅰ）





Pb区　溝3・4完掘状況



溝4　出土遺物
S＝1/4

第4図　A～D区古代主要遺構図（1：1000）

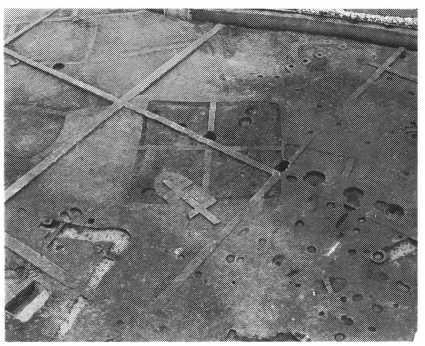
古代の遺構・遺物　本年度の調査区では古墳時代後期から古代に属する（以下、古代Ⅰ・Ⅱと区分する）遺構・遺物の密度がきわめて高かった。このことは、北東方向に隣接して展開している大毛池田・大毛沖遺跡との共通性をより強く示しており、全体が一連の遺跡であることをあらためて考えさせるものとなった。

古代Ⅰの遺構には、A区西部の掘立柱建物・竪穴建物・井戸、A区東部の掘立柱建物・竪穴建物、B区の掘立柱建物・竪穴建物・井戸・溝１・平行する小溝、C区の掘立柱建物・竪穴建物、D区西部の掘立柱建物・竪穴建物・小溝、D区中～北東部の溝２・３・４などがある。古代Ⅱの遺構には、A区東部～B区西部に掘立柱建物・井戸・溝・土坑などがある。時期は平安時代前期と考えられる。

古代Ⅰの遺構のうち、A区西部の遺構は６世紀代、他は７世紀以降のものである。A区西部は昨年度の調査区のすぐ東にあたり古墳時代の微高地東辺といえ、この東方・北方は古墳時代には低地部であり前期の水田が確認されている。

７世紀以降では、まずB区を南西から北東にほぼ一直線に続く溝１とその北と南に展開する居住域があげられる。溝１は断面が逆台形を呈し、その上層から中層にかけて須恵器・土師器が出土した。これはその周囲の居住域から廃棄されたものと考えられ、時期は７世紀初頭にあたる。また、溝１には平行する小溝を伴っている。次にC区北東からD区にかけての居住域とD区の数条の溝があげられる。ここは、本年度調査区のなかで古代の遺構・遺物が一番密な区域であり、掘立柱建物・竪穴建物をあわせて３０棟以上存在する。時期は７世紀前半にあたる。この居住域が展開していた時期に溝２・３・４が掘削されている。溝２・３はほぼ同規模で南北方向に平行して続いている。溝間は８ｍ程で当時のこの地域の幹道を思わせる。また、溝４（以下、大溝とする）は幅８ｍ強、深さ１．５ｍ強で直線的に続いている。出土遺物は、上層から掘肩にかけて８世紀後半の盤・長頸瓶が出土し、中層から下層の埋土は細～中粒砂であり遺物をほとんど含まなかった。最下層からは、７世紀代の須恵器を中心に出土した。

門間沼遺跡の北東に展開している大毛池田遺跡では、この大溝の続きと考えられるものを含めて他に４条の大溝が確認されており、E区ではさらに他の大溝の一部が検出されると考えている。大溝の具体像を把握することは、古代を考えるうえで非常に重要であり、今後地域全体で検討していく必要があろう。　（小川芳範）



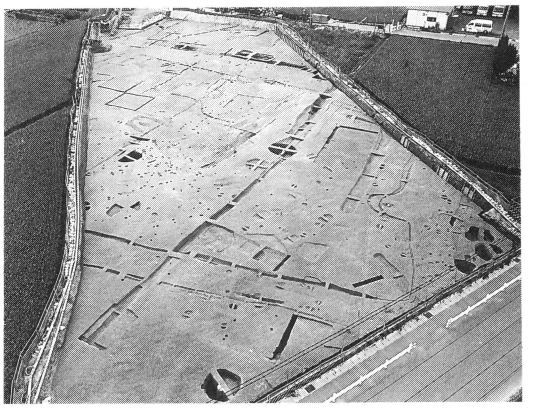
A区西部　完掘状況（古代Ⅰ）

Da区　掘立柱建物（古代Ⅰ）

中世　今年度の調査によって、中世が二期に区分されることが明確になった。

Ⅰ期は、方形区画及び道が展開する時期である。いずれも小規模な溝で区切られているが、方形区画はその状況から二種類に大別される。すなわち、区画内に井戸・柱穴・土坑など遺構が密に展開するものと、希薄なものである。前者は居住域が想定されるが、後者は田畑などの生産域を含めた非居住的な区域が想定される。居住域は、６ケ所確認されたが、いずれも道に隣接している。居住域内で検出された井戸は、全てに構造物である曲物が認められるうえに、掘形径２～３ｍを計り、非居住域の井戸との相違がみられる。

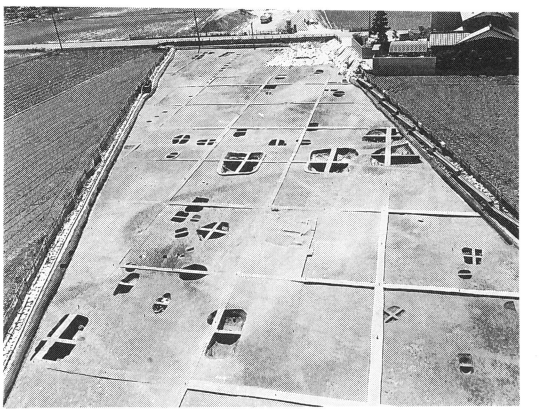
道は、南北方向３本、東西方向３本の計６本確認されたが、そのうち、Ｄａ区で検出されたものとＤｂ区で東西方向に検出されたものは他に比べて幅が約５ｍと広い。この２本の道の上面からは、いずれも江戸期の道が確認され、さらに、1884年（明治17年）に作製された地籍図に記された道とほぼ合致する。


方形区画（Ｃ区）

Ⅰ期の遺物は、量としては多いほうではないが、その中でも13世紀末～14世紀中頃の碗・皿類が大多数を占めている。

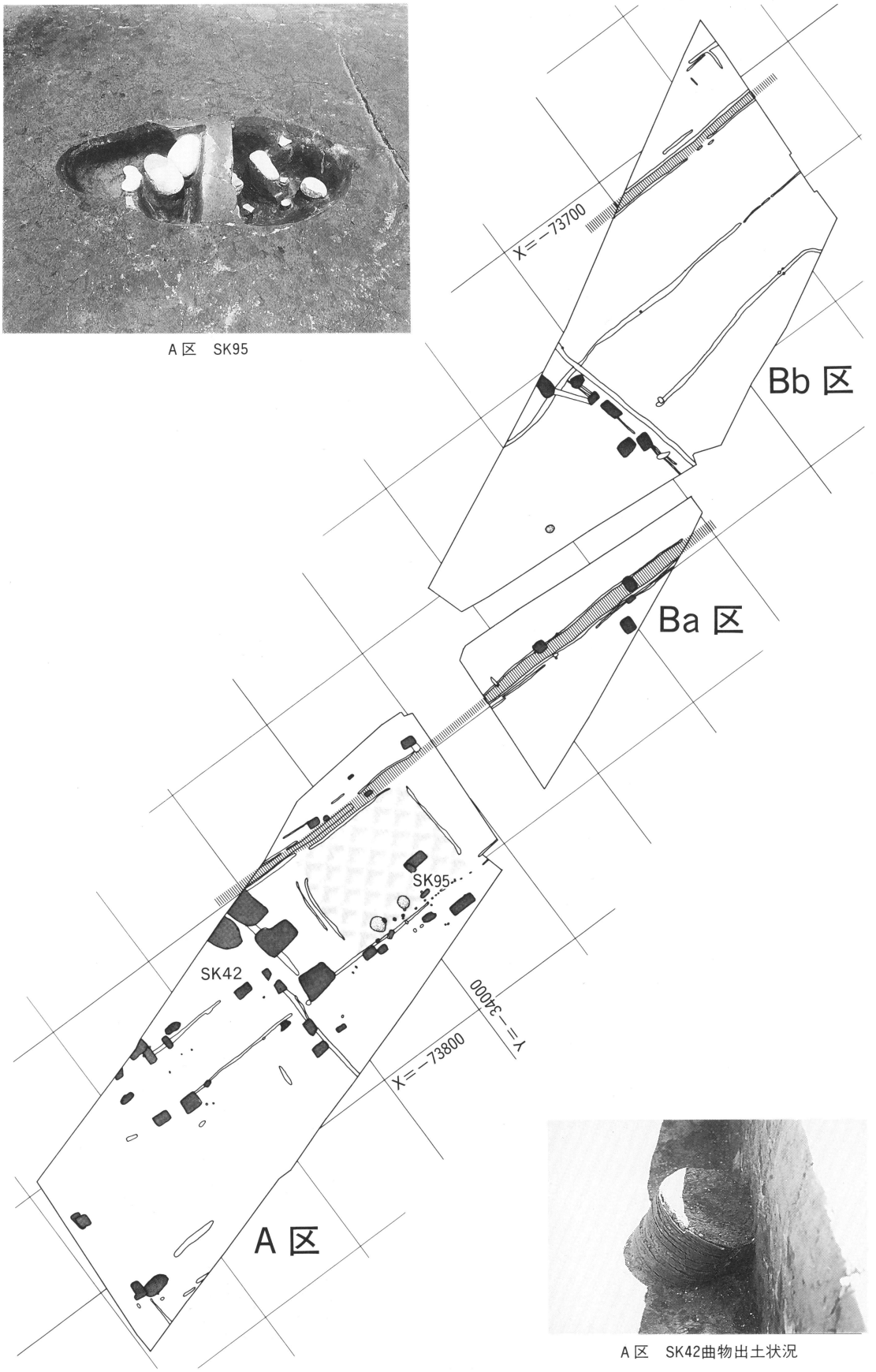
Ⅱ期は、墓域化する時期である。方形土坑が57基、円形・楕円形土坑が合わせて５基確認されたが、そのうちの70％近くがＡ区に集中している。これは、昨年度の調査区が墓域の中心にあたり、そのために、隣接するＡ区でもっとも多く検出されたと考えられる。また、土坑の配列状況には規則性が認められる。すなわち、溝状の窪地に土坑が展開しているのである。この窪地の下面からはⅡ期の遺構に切られる形でⅠ期の方形区画に伴う溝が検出された。このことから、Ⅰ期の方形区画部分が高まりとして残り、区画する溝の個所が廃棄後窪地化し、そこに土坑が掘られたと考えられる。

Ⅱ期の遺構のなかで特徴的なものがＡ区ＳＫ95である。楕円形土坑の中から河原石が５点以上確認され、さらに、破損散乱した状態ではあるが、北東隅から鉢が出土している。明らかに墓坑と想定できるものである。


方形土坑群（Ａ区）

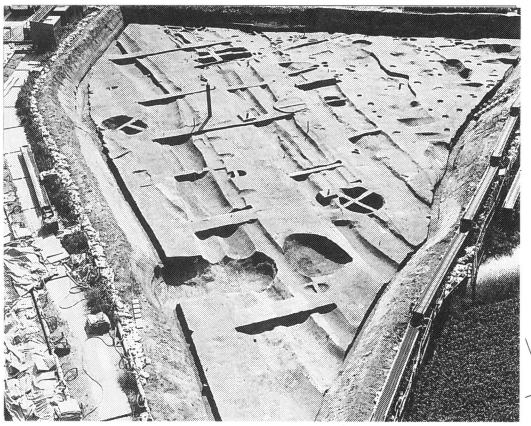
Ⅱ期の遺物は、碗・皿類がわずかであるが出土している。微量の遺物の中でも、Ａ区ＳＫ42の最下層からは、あまり他に類例のない小型の曲物が出土している。　（中野良法）

A区　SK95



A区　SK42曲物出土状況

第5図　中世主要遺構配置図（A～B区）（1：1000）



道及び居住域（Da区）

Ea 区

Eb 区

Y＝－33700

X＝－73600

Da 区

Db 区

95Da

SE04

C 区

Y＝－33800

X＝－73700

道

井戸

居住域

方形土抗・墓抗

C区　SE04

第６図　中世主要遺構配置図（Ｃ～Ｅ区）（１：1000）